

パスカルの《アポロジー》の プラン復元に関して (XIX)

竹 下 春 日

本論において、われわれが論ぜんとすることは、各 *liasse* の内部を、一番上に綴られたものから読むべきか、逆の順序に読むべきかの問題に、回答を与えることである。Steinmann 版は、一番上に綴られたものが最も新しい筈だと考え、順序を逆にすべきことを主張している。⁽¹⁾ 普通一般は、『第一写本』の順序（上から下へ）に読まれている。何れが正しいかの決定は、後説のごとく、見掛け程大きな効果を持つものではないが、しかし矢張り決定を要する重要事であることに、変りはない。

I 第一の証明

リヤス（断章綴）の内部を、一番上の文書（紙片）から一番下に綴られたものへと読むべきか、否かが重要事になるのは、これら諸文書に記された諸断章の内容の順序に関係を有するからであることは、言うまでも無い。それゆえ文書（紙片）の順序よりは、断章の順序の方に重要性があることに、われわれは留意せねばならない。したがって、一番上に綴られた文書の断章（単数または複数）と、一番下に綴られた文書の最後に記された断章との関係が、至大の重要事と成るのである。ところでわれわれは、これからリヤスのタイトルを利用して、推論を行うが、草稿に記されたタイトルなるものは、必ずしもパスカル自身のもではなく、別人の手によるものも存在する。⁽²⁾ しかしわれわれにとっては、パスカルの手になるタイトルではなくとも、章名（タイトル）がリヤスの内容に正しく一致照応し、これに相応しいものであれば、これを利用しうる

のである。したがってわれわれは、章名が内容に相応しいことの証明を、本文中において行いつつ、これに即して論証を進めたいとおもう。

われわれは先づ 18° 《宗教の基礎と反論への回答》 *Fondements de la religion et réponse aux objections* の章を、手掛りとし度い（章番号は、Lafuma による）。この 18° 章に相当するリヤスの一番下に綴られていた紙片に書き込まれた fr. は、La. 451-Br. 228 ⁽³⁾ である。そうしてその内容（全文）は、次の如くである——《無神論者たちの反論。「だが、われわれには何の光もないのだ。」》 *Objections des athées : ((Mais nous n'avons nulle lumière.))* この断章の内容が、章タイトル中の《反論への回答》 *réponse aux objections* の一部に相当することは、疑いえない。ところで、このリヤス（18° 章）の一番上に綴られていた紙片に記入されている最初の fr. は、La. 430-Br. 570 であり、その叙述は次のごとくである——《「基礎」の章に、「表徴」の章にある表徴の理由に関するものを付け加えなければならない。イエス・キリストがその最初の来臨を預言された理由。その来臨の仕方が曖昧に預言された理由。》

扱てこの引用部分が、《宗教の基礎》にかんするものであることは、内容上明らかである。なぜなら、《その最初の来臨を預言されたイエス・キリスト》 *Jésus-Christ prophétisé en son premier avènement* こそは、パスカルにとって、キリスト教なるものの最大の根拠、最も堅い土台だからである。——《…イエス・キリストを証明するものとして、われわれは預言を持っている。それは確実明白な証拠である。これらの預言は成就され、事実によってその真であることを立証したのであるから、これらの真理の確かさを、したがってイエス・キリストの神性の証拠を示している。ゆえに、彼において、また彼によって、われわれは神を知る。彼を離れ、聖書なく、原罪なく、約束され来臨した、なくてはならない仲保者なしに、人は神を絶対的に証明することも、正しい教理と正しい道徳とを教えることもできない。けれども、イエス・キリストにより、イエス・キリストにおいて、人は神を証明し、道徳と教理とを教える。ゆえに、イエス・キリストは人間の真の神である。》(La. 380-Br. 547) それゆえ 18° のリヤスを下から読めば、La. 451（一番下に綴られたもの＝《反論への回答》に相当するもの）→La. 430（一番上に綴られていたもの＝《宗

教の基礎》に相当するもの) となり、タイトルの示す《宗教の基礎》→《反論への回答》に逆行することになる。

ところで、タイトルにおける《宗教の基礎》なる語句の先行性は、当然である。なぜなら、《反論》 objections とは、キリスト教の《基礎》 fondements に対する《反論》を、何よりも先づ意味するのでなければならないからである。キリスト教の《基礎》ならざる非本質的部分に対して反論しても、論証の効果は少ない。それゆえ、《反論》とは《基礎》に対する反論であり、したがって反論さるべきキリスト教の《基礎》が、先づもって提示されねばならないのである。それゆえ章タイトルの示す《宗教の基礎》→《反論への回答》は、理の当然であり、この順序に合致する断章の順序こそ、正しい順序であると、言いうるのである。かくてわれわれは、La. 430→La. 451 の方向を辿ること、すなわちリヤスの一番上に綴られたものから順次下に綴られたものへと読むべきことが、結論されるのである。

II 第二の証明

われわれは次に、15° 《人間を知ることから神への移行》 Transition de la connaissance de l'homme à Dieu の章を、採り上げることにする。この章(15°)中の La. 389-Br. 693 には、次のごとき叙述が存する——《人間の盲目と悲惨を見、沈黙している全宇宙をながめるとき、人間がなんの光もなく、ひとり置き去りにされ、宇宙のこの一隅にさまよっているかのように、だれが自分をそこにおいたか、何をしにそこへ来たか、死んだらどうなるかも知らず、あらゆる認識を奪われているのを見るとき、……私はといえば、……自分の見ているもの以外に何かあるような様子が多分にあるのを見て、あるいは神がみずからのしるしを何か残しておられはしないかと探求したのだ。》この文章の前半は、人間存在の根源的状态にかんする知が語られ、後半の部分は神のしるしの《探求》 chercher としての神への志向を、示している。それゆえ、人間の存在状態の知→神への志向が述べられているのであるが、これは本来パスカルの《アポロジ》そのものが、啓蒙的意図をもって書かれたものである以上、

当然のことと言いうるのである。扱てこの章を構成するリヤス中、一番上に綴られている紙片に書かれた最初の断章は、La. 384-Br. 98⁽⁴⁾である。その叙述の始めの部分は、次のようである——《誤りに導く先入観。／すべての人が手段についてだけ熟慮して、目的についてそうしないのは、嘆かわしいことである。各人は、それぞれの職務をどういうふうに果たそうかということを考えている。しかし、その職務、そして祖国の選択ということについては、運命がそれをわれわれにあてがってくれるのである。云々》この文中の《すべての人》*tous les hommes*、および《各人》*chacun*なる語に徴して、この断章が《人間を知ること》*la connaissance de l'homme*に相応しいことが、分る。而してこの章中の最後の断章(リヤスの一番下に綴られたもの——注2参照)は、La. 393-Br. 517であり、その内容は次のごとくである——《心を安んじるがよい。君がそれを期待すべきは、君からではない。むしろ反対に、君から何ものも期待しないことによって、それを期待すべきである。》

以上が La. 393 の全文であるが、この引用文中の《それ》(1')とは、Brunschvicgによれば、神の「恩寵」*la grâce*⁽⁵⁾を意味するものである。したがって La. 393 の内容は、《神への移行》*Transition à Dieu*に該当する。かくて La. 384 → La. 393 の順序は、全体として、章タイトルの指示する《人間を知ることから神への移行》の順序と、完全に一致するものである。それゆえリヤスの内部を、一番上に綴られた紙片から順次一番下に綴られたものへと読むべきことが、分るのである。

III 結 論

以上二つの証明により、われわれは断章群の順序が、リヤスの一番上に綴られた紙片に最初に記入された断章から、同じリヤスの一番下に綴られた紙片における最後に記された断章へと向う順序が、パスカルの意図した正しい順序であること、知った。

しかしこの fr. の順序は、厳密に規定された順序であろうか。われわれは先づ、次の事態を考慮に入れねばならない。それは第一に、パスカルが論文を作

製する場合、計画的論理的に思考したということである。これは、パスカルの数学的乃至物理学的論文を一見すれば、明瞭であるが、この事実は彼の甥の手になるポール・ロワイヤル版『パンセ』の序文中にも、看取しうるのである——「かれという人〔パスカル〕は、種々の事柄を外部に表現する前には、十分熟考し、頭の中で整理し、望ましい結果が得られるように、何を一ばん先にし、何を一ばん後におくべきか、全体をどのような順序で配列すべきかについて、深く思いをこらして、考量吟味するのが常であった。⁽⁶⁾」

他方 Périer (パスカルの甥) は、次のごとく同序文中で述べている——「それらは全部、幾冊かの綴りに束ねられていたが、先にわたくしが注記しておいたように、心に思い浮かぶままに小さな紙片に書きとめて行っただいいわば思いつきとも言うべき思想の表現にすぎなかった……」⁽⁷⁾と。かようにパスカルは、計画的思考の結果たる fr. を記すとともに、他方において彼は、「心に思い浮かぶままに」 à mesure qu'elles [ses pensées] lui venaient dans l'esprit, 彼のパンセを書き記したのである。それゆえ、fr. 中には謂わば偶生的なるものも、あったのである。したがって、リヤス中に書き留められた諸断章の順序は、多かれ少かれ厳密なる計画的路線から逸脱した場合もありえたことが、推定されるのである。かくして fr. の順序は、厳密に決定されたものではあり得なかったのである。

以上の一例として、われわれは 14° «この神の証明方法の卓越性» の章を、扱うことにし度い。この章の冒頭に掲げられた fr. は、La. 380-Br. 547 である——«イエス・キリストによる神。／われわれはイエス・キリストによってのみ神を知る。この仲保者がなければ、神との交わりはすべて取り去られる。イエス・キリストによって、われわれは神を知る。イエス・キリストなしに神を知り神を証明すると主張した人々は、無力な証拠を持っていたにすぎない。しかし、イエス・キリストを証明するものとして、われわれは預言を持っている。» この文中の最後の«しかし、……»以後は、既に I (第一の証明) のうちに、掲載されている。そうして、この I 中に引用された叙述に後続する文章は、次の如くである——«／しかし、われわれは、それと同時に、われわれの罪愆を知る。なぜなら、この神はわれわれの悲惨の救済者にほかならないから

である。そこで、われわれは自分の罪を知ることによってのみ、神を明らかに知ることができる。したがって、自分の悲惨を知らずに神を知った人々は、神を崇めたのではなく、自分を崇めたのである。／<世は自分の知恵によって神を認めなかった。そこで神は、宣教の愚かさによって、信じるものを救おうとされたのである>》以上が、La. 380 の全容であり、この fr. に後続する La. 381-Br. 543 は、次の如きものである——《序言。神の形而上学的証拠は、人々の推理からはなはだかけ離れ、その上すこぶるこみいつているので、さして感銘を与えない。それはある人々には役立つにしても、彼らとその証明を見ている瞬間だけ役立つにすぎない。一時間もたつと、欺かれたのではないかとあやぶむ。|<彼らは好奇心によって見いだしたものを、高慢によって失った>|これがイエス・キリストなしに得られる神の認識、すなわち、仲保者なしに知った神と仲保者なしに交わることの結果である。／それに反して、仲保者によって神を知った人々は、自分の悲惨を知る。》

扱て以上二個の断章のうち、後者 (La. 381) の頭初には、《序言。》Préface. なる小見出しがあり、この断章が序言の全体または序言の一部であることを、示している。しからばこの《序言》に対応すべき<本論>は、何処に存するであろうか。われわれは前掲の La. 380こそ、まさにこの章における本論の少くとも一部を構成するものと、考えざるをえないのである。なぜなら (イ)——この fr. の主旨は、イエス・キリストによってのみ、神を知りうるのであり、これを離れては神を証明し得ないというにあり、これは 14° の章名たる《この神の証明方法の卓越性》Excellence de cette manière de prouver Dieu の内容として、まことに相応しいものと言いうるからである (ロ)——次にこの章を構成する断章としては、前記の二断章の外に、La. 382-Br. 549, La. 383-Br. 527 の二個が存するが、全断章4個のうち、La. 380 が量的に最も長大であり、内容的に充実しており、かつその情熱的筆致は、表現において、まことに美事である。すなわち、fr. La. 380 は、量質ともに 14° 章の断章中随一であるということである。

かように La. 380 は 14° 章の<本論>の一部たるに相応しいものであるが、この事はさらに、次の場合を想定することによって、これを確かめうるの

である。仮りに La. 381 を欠いたとしても、14° 章全体は補足的叙述において不足であるという程度にすぎないが、もし La. 380 が欠如したと仮定すれば、この章全体が貧困化し、迫力を欠き、充実感に乏しいものとなることは、必定であり、殆んど核心を失うに等しいのである。

斯くて (イ) および (ロ) により、La. 380 は 14° 章の本論の一部と解しうるのである。したがって断章の配置順としては、La. 381 (序論) → La. 380 (本論の一部) となるべきものである。われわれは茲に、諸断章の配列における一種の乱れを見るのである。そうしてこの事は、fr. の或るものが「心に思い浮かぶままに」書き留められた結果であり、先きに述べられた断章群の配列の規則性 (リヤスの一番上に綴られた紙片の一番最初に記された fr. から、読み始めるように配置されていること) は、パスカルの構想の計画性に照応する事実である。したがって断章群は、大体において規則正しく配置されているが、この順序は厳密なものではないと、結論すべきものである。

しからばなぜパスカルは、諸断章を厳密に規則正しく配置しなかったのであろうか。かかる配置を達成すべき手段に、欠けていたのであろうか。しかし、これは簡単である。番号を付与すれば、よいのである。しからば、なぜ番号が付与せられなかったのであろうか。われわれは、ここに到って、各リヤスに何故番号が付せられなかったのであろうか、という問題 (拙論 V 回) と同種の問題に、再び出会ったのである。それゆえ、われわれは再び同様の解決を、呈示すべきである。即ち、それは以下のごとくである。リヤス中に収めるべき諸断章に番号を付与しつつ、パスカルが思索を展開していた場合を想定するならば、新しいパンセの前述のごとき偶成の結果を、実際紙片に書き込むとき、このものが既存の番号より多い数字のものであるという保証は、無いのである。もし既存の番号を示す数字の間に挿入すべき性質の fr. の場合は、番号の付け替えが必要になって来るのである。しかもリヤス作製後には、Non classé の fr. の統合が、予想されていたのである。かくて番号付与とその変更とは、多大の煩雑をもたらすであろうことが、予見されたのである。それゆえパスカルは、大まかな配列を決定したのみで、厳密な順序配列を決定しなかったのであると、推測しうる。こうしてリヤス中に記入された諸断章の順序には、いささ

かの前後関係の乱れが生ずることと成ったのであるが、リヤス内の fr. の順序に見られる不整合は、fr. の偶成の結果とはいえ、これは純粹の自然状態ではなく、パスカルの計画のうちに予定されていた *désordre* であつたのである。言い換えれば、かかる順序不同は、概略的に決定された配列内における乱れにすぎないものと、結論しうるのである。

注

- (1) Voir J. Steinmann, *Pascal, Pensées*, Monaco, Éd. du Rocher, 1962.
- (2) Voir L. Lafuma, *Recherches pascaliennes*, Paris, 1949, p. 50, note 46. なおわれわれが、本文中で取扱う章名のうち、最初のもの——《*Fondements de la religion et réponse aux objections*》は、諸断章（未分類のものを含む）中の表現を借りて作られた合成語である¹⁾。また、第二番目に採り上げられた《*Transition de la connaissance de l'homme à Dieu*》は、「写本」中にしか見出されないタイトルである²⁾。
 - 1) Z. Tourneur, *Pascal, Pensées*, Paris, Éd. de Cluny, 1938, p. 131, note 6.
 - 2) *ibid.*, p. 108, note 1.
- (3) La. 451-Br. 228 は、Éd. Lafuma (Éd. du Luxembourg, t. I, p. 155) によれば、「第一写本」の p. 123 のもの (MS. 244) である。因みに 18° 章は、同写本中の p. 117 (MS. 223—La. 430-Br. 570) から始まっている (MS. の番号は、fr. の筆写された順序を示す)。
- (4) La. 384-Br. 98 は、「第一写本」の p. 89 に記されている (MS. 193)。なお La. 393-Br. 517 は、同写本 p. 101 に存する (MS. 202)。
- (5) Voir Blaise Pascal, *Pensées et opuscules*, Paris, Éd. Brunshvicg, 1953, p. 564, note 3.
- (6) Pascal, *Œuvres complètes, Présentation et notes de L. Lafuma*, Paris, Éd. du Seuil, 1963, p. 495. (田辺保訳)。
- (7) *ibid.*, p. 498. (田辺訳)。

(注了)